

『ノストローモ』における政治の抑圧の諸相

高畑 悠介

Abstract It has been widely recognised since the time of early criticism that Conrad's *Nostromo* shows a certain kind of strangeness as a novel, and F. R. Leavis's diagnosis that we can discern something hollow about its reverberation has been inspiring, despite its sheer intuitiveness, generations of Conrad scholars. Some critics have attributed that 'hollowness' to Conrad's repression of politics which derives from his need to criticise imperialism, an ideology which he inwardly endorses. Partly agreeing with those critics, this paper proposes that Conrad's repression of politics in *Nostromo* should be considered within another context—that is, the need to protect the novel's tragic impact from being spoilt by the novel's own nihilistic vision. In order to meet this necessity, the novel employs two strategies: firstly to eliminate Decoud, who represents the nihilistic view of Costaguana's politics in the novel, after he fulfills his role to deepen the political analysis, and secondly to make Nostromo the scapegoat for the loss which international capitalism inflicts on Costaguana's people and society, and thereby to provide a kind of consolation for the novel's nihilistic denouement. The novel exhibits self-contradiction in that it needed to repress its own political insights to protect its cathartic effect, and this, together with the ineffectualness of the above strategies, explains what Leavis diagnosed as *Nostromo*'s 'hollowness'.

はじめに

ジョゼフ・コンラッドの最重要作品の一つであるという点でほとんどの批評家の見解が一致する『ノストローモ』であるが、本作にはコンラッドの他作品にはないある種の奇異な面があるという認識が断続的に示されてきた。いずれも後の議論で改めて触れるが、ここでいくつか例を挙げれば、まずノストローモがタイトル・キャラクターとしての資質を欠いていると

いう批判が寄せられており、ダフナ・エルディナスト=ヴァルカンは本作のタイトルを‘a question-begging title’¹と形容しているし、ジョイス・キャロル・オーツは『ノストローモ』は‘mis-titled’な小説だとまで主張している（81; 595）。また、デクーの自殺を描く場面が不自然だという批判も多く、マーティン・プライスは、デクーはプラシド湾で事物の無関心に飲み込まれたのではなく、作者に断罪され処刑されたのだと論じており、オーツはデクーの自殺の理由についての記述が作者の操作的な身振りに満ちていて極めて‘dogmatic’であると断じている（78; 596）。また、政治や歴史の領域から後退し、ラブロマンスと神話のモードに収斂する本作の結末についても数多くの批判や当惑、不満が示されてきた¹。

そして、『ノストローモ』のある種の不可解さについてのこれらの批評の中で最も（悪）名高いのが、初期の批評家 F.R.リーヴィスが 1948 年に残したコメントであり、リーヴィスは‘for all the rich variety of the interest and the tightness of the pattern, the reverberation of *Nostromo* has something hollow about it; with the colour and life there is a suggestion of a certain emptiness’²と論じている（200）。これは極めて直感的かつ印象批評的なコメントであり、理論化の進んだ現代の批評においてはそのまま受け入れられ得ないものではあるが、同時に『ノストローモ』という小説の本質に肉薄する優れた洞察でもあって、今日に至るまで、本作の批評に関わる多くの人間にインスピレーションを与え続けてきた面もある。この一見謎めいたリーヴィスの診断に対しては、アーノルド・ケトル（1953）、キアーナン・ライアン（1987）、ジム・ライリー（1993）という三人の批評家が、前走者の議論を踏まえつつ、一致して「政治の抑圧」という観点から説得的に読み解いており、既にその秘儀的な性格は大方霧散していると言える。

三つのうち特に切れ味の冴えるライアンの議論を要約すると、『ノストローモ』は「闇の奥」同様、作品世界の政治的現実を取敢て存在論的・実存的なものとしてぼかした形で提示することにより政治を抑圧しており、この抑圧がもたらす麻痺の感覚こそがリーヴィスの言う「空ろさ」の出所だという認識が骨子になっている。そのような抑圧が要請された理由として、コンラッドが帝国主義に対して内心親和的な姿勢を持ちつつも、本作ではその帝国主義を批判的に描かねばならなかったという一種のジレンマをラ

ライアンは挙げており、その矛盾を回避するために政治の抑圧が試みられたと結論づけている。

ライアンを筆頭とするこれらの議論は非常に説得的であり、一見するとリーヴィスの提示した本作の「空ろさ」についての謎は、既に完全な解決を見たかのようにも思える。しかし、本作における政治の抑圧を看破したときの徹底や手際の鮮やかさと比べると、その抑圧が必要とされた理由に関しての彼らの議論はやや綿密さを欠くところがあり、彼らの主張する「帝国主義批判と作者自身の政治的保守性との間のジレンマ」という解釈は検討の余地を多分に残しているように思われる。本稿では、『ノストローモ』における政治の抑圧の理由として、ライアンらの主張する「自らの保守性とのジレンマ」ではなく、作品の悲劇としてのインパクトをニヒリズムによる矮小化から守る必要性という、これまで明確に指摘されてこなかった理由を提示したい。併せて、本作の政治の抑圧という現象において従来言及されてこなかったノストローモのスケープゴート化についても検討を加えたい。

1. 悲劇としての『ノストローモ』とエミーリア・グールドの中心性

ラテンアメリカの架空の国家における政治、経済、社会を総体的に描き出しつつ、同時にその中で暮らす人々の個人的な物語をも深く掘り下げる『ノストローモ』は——その複雑な時系列による実験的な描出法や、驚くべき政治的先見性なども勘案すれば——極めて野心的で先鋭的な全体小説であり、そのような作品について一面的な捉え方を試みることは単純化の危険と隣り合わせである。しかし、それを踏まえた上で、本稿では敢えて『ノストローモ』という小説の本質は一言で言えば悲劇であるという認識から議論を開始したい。

主要キャラクターが死や破滅、もしくはそれに類する帰結に至るという意味ではコンラッドの多くの作品が広い意味での悲劇に分類され得るが、その悲劇的な結末がもたらす効果が、悲劇性と共存する喜劇性やアイロニーによって屈折させられているものを除くとき、悲劇と分類できるコンラッド作品はそう多くない。克服し切れなかった己の甘さと宿命の力により破滅するジムの最期は悲劇的にも見えるが、それを読者に伝えるマーロウ

の語りの信頼性への疑問、及びジュエルを筆頭とするパトゥーザンの住人を軽視しロマンに酔うジムのナルシシズムと白人中心主義の発露が、『ロード・ジム』の悲劇としての余韻を濁らせている²。ラズモフの破滅もまた表面上は悲劇であるが、ナターリヤへの一方的な告白で露呈するラズモフの自閉性や攻撃性が不協和音を奏でている上に、軽薄でラズモフに対して淡白な初老の語学教師がラズモフの物語の語り部を務めるという実験的な設定のため、悲劇性がグロテスクなアイロニーにより多分に侵食されている³。

このような中で、『ノストローモ』は、その中核部分においては、留保のつかない悲劇であるというのが本稿の主張である。多くの批評家が、少なくとも部分的には本作を悲劇とする前提を共有しているが⁴、その認識を最も明示的に示したのは E.M.W.ティルヤードであり、ティルヤードはグールドを *tragic hero* として規定し、本作の物語をグールドが銀山に賭けた理想が敗れる悲劇として捉えている (151-2)。しかし、『ノストローモ』が本質的に悲劇である——しかも上述のような留保のつかない悲劇である——という事実が最も鮮明に立ち現れるのは、エミーリアを本作の一義的な中心人物と捉えるときであり、先に本作の中核部分と表現したのもこのエミーリアを中心とする物語のことであった⁵。ティルヤードもグールド夫妻の運命が互いに結びついていることに言及しており、両者の物語は表裏一体ではあるが、作中で夫婦が登場するとき、語りが焦点を合わせるのは、序盤の一部を除けばほぼ一貫してグールドではなくエミーリアの心理であり、銀山に魅入られてからのグールドは主に外側から描かれることになる。また、読者による共感や感情移入がどれだけ寄せられるかという点でも、‘*material interests*’による非人間化が進行し結婚生活を放棄していくグールドよりも、人並み外れた思いやりや気遣いに満ちていて⁶、‘*for life to be large and full, it must contain the care of the past and of the future in every passing moment of the present. Our daily work must be done to the glory of the dead, and for the good of those who come after*’という印象的な言葉を残すエミーリアの方が遙かに勝っている (373)。フレドリック・ジェイムスンが‘*Conrad’s only interesting woman character*’と呼んだエミーリアは、作中の他のどのキャラクターよりも読者からの共感を強く受けることを期待されたキャラクターであり、それは例えば彼女の唇が開くだけで率直さと寛容さの香りが

吹き寄せるようだという、やや常軌を逸するほど好意的な本作の記述からも窺える (229; 48)。

銀山に託した理想のあまりのナイーブさという点において、エミーリアもアイロニーや批判の対象となる余地があることは確かで、彼女を悲劇としての作品の中心に置く解釈に留保をつける批評家も少数ながらいるが (Terry Collits 152-3; Benita Parry 116)、重要なのは、本作において国際資本主義がもたらすパブリックなレベルの悲劇に、プライベートで人間的な次元を与える役割を主に担っているのがエミーリアだということである。本作におけるパブリックなレベルの悲劇とは、一言で言えば欧米の国際資本主義によるコスタグアナの経済植民地化と搾取、及びそれに伴う人心の荒廃だが、それが群像劇としてのプライベートな物語と絡み合っているところに本作のポイントがあり、その結節点の中で最も重要なものがエミーリアの公私二重の幻滅の悲劇であると言える。

それを如実に示すのが、第3部第11章、欧米周遊から帰国した日に、その夜だけはグールドと二人の時間を過ごしたいというエミーリアの健気な切望が、銀山に出かける夫からの電話で無残に潰える場面と、その直前のモニガムとの会話で、‘material interests’の正体をエミーリアが改めて認識して立ち尽くす場面である。グールドが妻を蔑ろにする原因が銀山にあることを改めて強調し、コスタグアナ社会が銀山を巡る一連の出来事により被った損失の本質が端的に確認されるこの場面において、エミーリアの結婚生活における幻滅の悲劇と、理想を託した銀山に味わわされた幻滅の悲劇——プライベートなレベルの悲劇とパブリックなレベルの悲劇——が最も印象的な形で重なり合い、かつ頂点を迎えていると言える。

母になる望みの絶たれたエミーリアが感情を押し殺してバシリオ親子を見送り、それをモニガムが沈痛な心持ちで見守る様子を抑制を利かせて描き出すこの場面は、異論もあろうが、数あるコンラッド作品の中でも屈指の感動的な場面であり、読者はその痛ましさに胸が締め付けられるとともに、悲劇特有の心の浄化作用も経験することになる。このカタルシスこそが、本作が読者に与える印象のうちで最重要のものだと言っても過言ではないだろう。『ノストローモ』がその中核において留保のつかない純粋な悲劇であるという本稿の認識も、以上の議論を念頭に置けば受け入れられ得るの

ではないだろうか。この強烈なカタルシスに満ちた章の最後にエミーリアが悄然と‘material interests’とつぶやくとき、一つの悲劇が幕を閉じた感覚が与えられる（374）。

しかし、周知のように、『ノストローモ』はこの章では終わらないし、上述の概要では登場する余地がなかったノストローモがタイトル・キャラクターになっており、当然ながら、ここまでで述べてきた悲劇としての基本的な把握のみでは本作の理解は不十分である。次節ではまず、上述の強いカタルシスをもたらす本作の悲劇が矮小化の脅威を内部に抱えていることについて、デクーとの関係で論じる。

2. ニヒリズムによる悲劇の矮小化とデクー

デクーが作者の分身あるいは代弁者であり、それゆえに本作におけるキーパーソンであるということは、既に多くの批評家によって指摘されてきた⁷。また、デクーの本作における重要性のもう一つの理由として、コンラッド文学に通底する人間存在のジレンマ——懐疑主義・傍観主義は不毛なニヒリズムに墮する宿命にあるが、人間が継る理想や行動は幻想性の露呈を免れない——を体现するキャラクターであることも論じられてきた⁸。さらに、既述のように、そんなデクーの自殺に至る過程の描写に不自然なところがあることも指摘されている。これらを踏まえた上で本節で論じたいのは、作者の代弁者であるデクーの政治的なニヒリズムが、本作の悲劇としてのインパクトを矮小化して損なう性質のものであり、だからこそ、デクーを多少強引にでも作品世界から排除して悲劇のカタルシスを守る必要があったのだということである。

リビエラ政権とサン・トメ銀山の開発にそれぞれのキャラクターが託した理想や期待が、‘material interests’の非人間的なメカニズムによって無残に裏切られる様を描く幻滅の悲劇が『ノストローモ』という作品であるというのが本稿の議論の出発点だが、その際に一つ言えるのは、この悲劇が悲劇としての威厳を持つためには、それらの理想を託すだけの余地がコスタグアナの政治や経済、社会の内に存在しなければならないということである。もし初めからそのような余地がないのであれば、それらの理想は愚かな託され方をしたということになり、それは悲劇というよりはむしろ悲

しい茶番劇とでも呼ぶべきものになってしまう。

しかし、実際に本作を熟読した上で半ば必然的に浮かび上がってくる認識というのは、今で言う失敗国家に近い途上国であるコスタグアナにはそのような理想を託す余地はなかったという認識であり⁹、それを容赦なく前景化してしまうのが、コスタグアナの政治を‘*une farce macabre*’であると斬り捨て、母国の発展に心を砕くアベリャノス親子の奮闘を‘*ploughing the sea*’¹⁰と形容するデクーその人である（136）。第2部第5章、バリオスの部隊の出陣を見送った帰りの馬車の中で、ラテンアメリカが宿命づけられた搾取のメカニズムについて、フランシス・ドレイクを引き合いに出しながらデクーが示す洞察は、極めて優れていると言わざるを得ない。

‘In those days this town was full of wealth. Those men came to take it. Now the whole land is like a treasure-house, and all these people are breaking into it, whilst we are cutting each other’s throats. The only thing that keeps them out is mutual jealousy. But they’ll come to an agreement some day—and by the time we’ve settled our quarrels and become decent and honourable, there’ll be nothing left for us. It has always been the same. We are a wonderful people, but it has always been our fate to be’—he did not say ‘robbed’, but added, after a pause—‘exploited!’ (127)

この一節は、ドレイクを筆頭とするイギリス海賊の末裔たるアングロ・サクソンのホルロイド財閥が、形を変えた収奪である経済植民地化をコスタグアナにもたらすばかりか、モンテロ派による内戦までをも引き起こして大勢の死者を出し、挙句の果ては西部共和国の傀儡的な独立によって銀山が欧米資本の完全な支配下に入ることで搾取構造が完成するという本作の出来事を完璧に予見するものであり、特にデクー亡き後の作品終盤で『タイムズ』が西部共和国に対して与える欺瞞に満ちた称号‘*Treasure House of the World*’¹¹がここで先取りされていることに気づくとき、デクーの予見的な洞察の鋭さが一層際立つことになる。

作中でコスタグアナが経験した変化をどう評価するかという点で批評家の見解は必ずしも一致を見ておらず、肯定的な評価の代表例としては、ロバート・ペン・ウォレンの‘we must admit that the society at the end of the book

is preferable to that at the beginning' というコメントが有名である (xxix)。しかし、前述のエミーリアの痛ましい幻滅や西部共和国分離後の国民の憤りを描く第3部第11章を前にしてそのような解釈が保てるかどうかは甚だ疑問であり、またコスタグアナのモデルになったと目されるのが、パナマの傀儡的な独立により運河の地政学的な価値を実質的にアメリカに収奪されたコロンビアであるという事実からも、そのような解釈は楽観的に過ぎると言わざるを得ない。むしろ、コスタグアナが経験したのは欧米資本による搾取構造への組み込みでしかなかった、‘*une farce macabre*’そのものだったという解釈の方が妥当であり、その意味でデクーのニヒリスティックな達観は完全に正しかったと言える。

問題となるのは、このようなデクーの政治的な達観が、本作の悲劇としての威厳とそれに伴うカタルシスを損なう性質のものであるということである。デクーの洞察に従えば、上述のようなコスタグアナの政治に理想を託したエミーリアたちが演じたのは、悲しくはあってもあくまで茶番劇でしかなかったということになり、それは本作の悲劇としての存在理由そのものを揺らがせるものである¹⁰。実際、デクーは作品中盤までは作品の政治的な掘り下げを深めるため作者の代弁者として活躍するが、内戦の終結と西部共和国の独立が迫る頃には、むしろ作品にとっての邪魔者になっており、もしデクーが作品終盤に生きていれば、上述の経済植民地化の完成を容赦なく暴き出し、エミーリアたちの悲哀を‘*Quelle farce!*’の一言で一刀両断にしたであろうことは想像に難くない。ある批評家は、本作が終盤にノストローモの個人的な物語に焦点を当てるのは、‘*material interests*’の勝利を前にしてこの物語は他に言うべきことがあまりないからだと論じているが、コスタグアナ社会とエミーリアたちが最終的に辿り付いた状況はそれだけ殺伐としたものであり、デクーの辛辣な知性であればそれを穏健に許容するという事は考えられない (Mark Conroy 137)。『ノストローモ』は知的なレベルと情緒的なレベルの間で読者の反応が分裂するタイプの小説であり、読者は理性の面でエミーリアたちの失敗を批判しつつも、情緒の面で彼らに感情移入せざるを得ないという趣旨のコメントを複数の批評家が寄せている¹¹。デクーが最後まで生き残り政治的な掘り下げを深める役割を続けた場合には、この両者のバランスが崩れることは必至である。

そして、このような事態を回避すべくコンラッドが取った戦略こそがブラシド湾におけるデクーの自殺であり、このような事情から要請された自殺であったために、その描写に不自然なところや説得力に欠けるところが生じたと理解することができる。既述のように、デクーの排除の仕方に不自然なところがあることが指摘されてきたが、その排除の理由として悲劇の矮小化の阻止を挙げた批評は見当たらない。しかし、デクーがこのような形で作品から排除されねばならなかったということ自体が、本作が悲劇の矮小化の脅威を内部に抱えていることの何よりの状況証拠になっているのではないだろうか。オーツはデクーを排除する際のコンラッドの手つきに‘a certain crude, punitive quality ... which art usually obscures’が見て取れると指摘しているが、このような懲罰的な性質が生じてくる根底にあるのは、本作の悲劇としての脆弱性を容赦なく暴いてしまうデクーというキャラクターに向けられた、作者による一種の憎悪であると考えられる (597)。政治的なテーマを掘り下げつつも、そこから必然的に生じてくるニヒリスティックな認識を抑圧しなければならないという決定的な矛盾が『ノストローモ』という小説の中核にあるが、その矛盾を体現しているのがデクーであると言える。

デクーを排除したことの効果は作品終盤において明瞭に見て取ることができて、第3部第11章でコルベラン神父が搾取された国民による内乱の可能性をほのめかす場面は、西部共和国独立後の政治状況が最も深く追究されている部分であるが、デクー不在の物語はこれ以上コスタグアナの政治問題を掘り下げずに焦点を他へ移してしまう。この結末における政治の脱焦点化は本作が受ける主要な批判の一つでもあり、次節で改めて検討することになるが、同時に、本作の物語の‘*une farce macabre*’としての側面を抑制する機能も果たしていることに留意すべきである。どこまで成功しているかは別として、コンラッドはデクーが西部共和国独立後の社会について不穏なコメントを発するのを禁じることによって『ノストローモ』の悲劇としての威厳を保つことを試みたと言えよう。

本節では『ノストローモ』において政治の抑圧が要請される理由について、ライアンらが従来提供してきたものとはまったく別の説明を試みてきた。そして、その抑圧の戦略の一つ目として、作品世界からのデクーの排

除を論じてきたが、次節では、もう一つの政治の抑圧の戦略として、これまで明確に論じられることのなかったノストローモのスケープゴート化を検討したい。

3. 神話のモード、ノストローモのスケープゴート化

前節冒頭で、コンラッド文学に通底するニヒリズムと幻想の間のジレンマ、あるいは行動と傍観の間のジレンマについて言及した。本作ではデクーのみならず、グールドやモニガム、エミーリア等多くのキャラクターがこのジレンマと各々の流儀で関わっており、本作がコンラッド文学の正典であることの一つの証左になっているのだが、このジレンマとまったく関わりのないノストローモがタイトル・キャラクターの地位を与えられていることは特筆に価することである。ノストローモは思想や原理を完全に欠いているがゆえ、理想や幻想に惑わされることもなければニヒリズムに侵されることもなく、過剰な傍観主義や病的な行動への衝動に染まることもない。他にもノストローモがタイトル・キャラクターとしての資質を欠いているという批判は既述のように多く寄せられてきており、彼が本作のタイトルに据えられていることについては何らかの説明が求められるところである。

本作の大きな特徴として、冒頭のアスエラ半島のグリーンゴの逸話に代表される神話や伝説、迷信のモードが、国際資本主義のリアリスティックな分析と組み合わせられているというジャンル上の特異性が挙げられる¹²。特に、冒頭のアスエラ半島のグリーンゴ伝説に本作の物語内容の‘allegorical framework’としての役割が与えられているということは特筆すべき事実であり、銀山による非人間化が進行するグールドと、銀の呪いで破滅に向かうノストローモが二人のグリーンゴの運命を体現していることは明らかである (Eloise Knapp Hay 84)。

その中で、物語に神話のモードを持ち込む役割を帯びているのはノストローモであり、このことが明確になるのはノストローモとデクーが銀塊の輸送のための船出に出る前後の部分である。キース・キャラバインが明敏に指摘しているように、この場面でノストローモがアスエラ半島の伝説についての意識に目覚めるまでは彼は一貫して外側から描かれてきており、

語りがノストローモの内面にフォーカスを当てるのはここが初めてである(638-9)。注目すべきなのは、ノストローモへの焦点化が始まるのとまったく同時に、冒頭以来一切言及されてこなかったアスエラ半島の伝説が唐突に、しかも複数回持ち出されるということである。ヴィオラ邸でのテレサとモニガムとの会話、及び船の中でのデクーとの会話という短い時間の中で、ノストローモは計3回アスエラ半島の伝説に言及しており、このタイミングの一致は当然偶然ではなく、ノストローモと神話のモードの密接な結びつきを示す事象として理解できる(184-5; 186; 190)。また、ノストローモはテレサとデクーという二人の人間を見殺しにしたことの罪悪感を通じて銀の呪いを受けることになるが、この迷信に対して親和的な姿勢も、神話モードの導入役としてのノストローモの機能を示すものと捉えることができる。

この役割に従い、ノストローモは最後の2章において、銀の呪いという形で神話のモードを作品の前景に引き出すことになるが、これが政治や歴史からの後退であるという批判が数多く寄せられてきたのは既に述べた通りである。これを単なる傷や欠陥とみなすことも十分可能ではあるが、本稿の議論を踏まえれば、これは作品の焦点を政治からずらしてニヒリズムの前景化を阻止し、それによって本作の悲劇としてのインパクトを保つための戦略であると解釈することができよう。つまり、デクーの排除と並んで、結末におけるノストローモのラブロマンスと神話モードの前景化も、本作の政治の抑圧のための戦略として理解できるのであり、これが本稿の主張するノストローモを通じた政治の抑圧の戦略の一つ目である。

しかし、本作における政治の抑圧の戦略として最も特筆すべきなのはノストローモのスケープゴート化であり、本作はその結末のニヒリスティックなビジョンに対して、神話モードによる政治の脱焦点化よりもっと直接的な緩和剤を用意している。ノストローモが最後の2章で盗んだ銀の奴隷となって心の平安を失い最後に非業の死を遂げるまでの過程が、冒頭の伝説に出てきたグリングの運命の具現化になっていることは明らかであるが、これは冒頭の伝説の寓意——富と悪は結びついており、みだりに他者の富を求める者は罰を受けるという寓意——が現実の世界においても真実であることを暗示している。冒頭では貧しい現地人がこの寓意を信じ込む様が

‘by an obscure instinct of consolation’¹³と形容されていたことを思い起こせば、その寓意が、国際資本主義の本質をリアリスティックに抉り出す本作の中でそのまま実現するという結末は、ある種のどんでん返しと見ることで済ませることができるが、ノストローモによるこの「強欲は悪であり罰を受ける」という寓意の具現化により、貪欲な国際資本主義の一人勝ちという本作結末の虚無的なビジョンに対してある種の慰藉が提供されていると言える（5）。この、慰藉という形を取ったニヒリズムの抑制が、本作の悲劇としてのインパクトが内部から矮小化されるのを間接的に緩和していると理解することができるのである。

しかし、上述の解釈のはらむ論理のねじれを見て取ることはあまりに容易い。『ノストローモ』が描き出す痛ましい悲劇——エミーリアやアントニアらの味わった幻滅の悲劇や、コスタグアナ社会の荒廃と経済植民地化という悲劇——をもたらした強欲が、ノストローモのそれではなく、国際資本主義という非人間的なシステムそのものに内在する強欲であることは明らかである。本作の悲劇的な物語への慰藉として読者が何らかの罰や報いを欲するとすれば、それは実質的に誰にも害を与えていないノストローモの銀塊の横領ではなく、公私双方のレベルにおいて広範な害をもたらした‘material interests’¹⁴に向かうべきであり、ノストローモが本作のニヒリスティックな結末への慰藉として利用されるとき、彼は自分が犯していない罪について罰を受けていることになる。比喩的に言えば、ノストローモが受ける罰と作中の悲劇的な出来事はねじれの関係にあるのであり、本作において読者への慰藉のため破滅するノストローモは、ニヒリズムによる悲劇の侵食を防ぐためのスケープゴートにされていると言える¹⁴。

この点を踏まえると、本作の作者覚え書きについての理解が深まる面がある。コンラッドは『ノストローモ』の着想について、モデルとなった水夫がただの泥棒ではなく革命の犠牲者であった可能性に思い至ったときに本作の構想が広がり始めた¹⁵と述べているが、このくだりは上述の議論を念頭に置くと二重の響きを帯びてくる——ノストローモはコスタグアナの革命騒ぎの中で利用され犠牲にされるだけでなく、自身の名を冠した小説そのものによっても利用され犠牲にされているのである（408）。

結末におけるノストローモの英雄的な表象についても同様の文脈によっ

て説明することができる。リンダの‘Never! Gian’ Battista!’という情熱的な絶叫に続くこの小説最後のセンテンスにおいて、ノストローモはそれまで与えられてきた‘slave’という形容を解かれ、‘his conquests of treasure and love’を支配する成功者として描かれている(405)。エルディナスト=ヴァルカンはこの批判的な文脈で‘a sublime vindication of his life as a mythical hero’と呼んでいるが、リンダがノストローモの欲した女性ではなくむしろテレサの呪いを想起させ気を滅入らせる存在であったこと、及び、ノストローモがコソ泥であるラミレスと間違われて老人に撃ち殺されたということを考慮すれば、このノストローモの英雄化は到底額面通りに受け取ることはできない(83)。この半ば取ってつけたようなノストローモの英雄化は、作品のスケープゴートにされたことへの埋め合わせとしてノストローモに提供されていると解釈するとき最もよく理解できる事象であり、一見すると分不相応な彼のタイトル・キャラクターとしての地位も同じ理由で与えられたものだと考えることができるのである。

終わりに

ここまでの議論で『ノストローモ』を矮小化の脅威を内部に抱えた悲劇として捉え、その脅威を回避するための政治の抑圧の戦略として、デクーの排除と神話による政治の脱焦点化、及びノストローモのスケープゴート化を論じてきた。最後に指摘したいのは、これらの戦略がいずれも限定的な効果しかもたらさない、ある意味で杜撰なものであるということである。デクーが作品から排除されても彼のニヒリスティックな洞察の余韻は決して消えないし、エルディナスト=ヴァルカンが述べるように、神話のモードを現代人の読者に提示しても政治を効果的に脱焦点化することは困難であり(84)、また、ノストローモのスケープゴート化がはらむ論理のねじれや欺瞞はほとんど可視的なものであり、ごまかしとすら形容し得る戦略である。これらの戦略のある種の杜撰さ、及びそれらの戦略を必要とした『ノストローモ』という小説の自己矛盾——悲劇が矮小化の脅威を内部に抱え、政治的なテーマを掘り下げつつも同時にそこから必然的に生じるニヒリスティックな認識を抑圧しなければならないという矛盾——これこそがリーヴィスの見抜いた本作の「空ろさ」の本質なのではないだろうか。

注

- 1 結末について歴代の批評家が寄せてきた批判については、エルディナスト=ヴァルカンが有用なリストを提供している (84)。
- 2 YusukeTakahata 2016, pp. 171-221 参照。
- 3 拙論 (Takahata 2012) において、『西欧人の眼に』の語り手のラズモフに対する姿勢の問題について論じた。
- 4 例えば、ジャック・ベアトゥーは一貫して本作の物語を悲劇と捉えているし、ヤコブ・ルーテは本作の物語内容を‘distressing’と形容している (216)。
- 5 エミーリアを本作の悲劇の中心人物と捉える批評家は数多いが、例えば Berthoud, pp. 129-30 を参照。
- 6 例えば、第2部第1章でリビエラ政権の誕生の知らせを聞いてドン・ホセ・アベリャノスが安堵のあまりよろめいたのを見て、エミーリアが頬を差し出す振りをしてアベリャノスを支え、彼の弱さが露になるのを防ぐというくだりがあるが、ここなどはエミーリアの際立った人柄の良さを示す好例と言える (103)。
- 7 例えば、Erdinast-Vulcan, p. 76 や Lothe, p. 193 などを参照。
- 8 このジレンマについては、例えば、Kenneth Graham, p. 6、Oates, p. 591、R.A. Gekoski, p. 22 などを参照。
- 9 例えば、内戦の最中ガマチョが演説でフランス、イギリス、ドイツ、アメリカに宣戦を布告すべきだと主張する場面があるが、これは途上国の政治の救いがたい拙劣さを浮き彫りにするパロディと捉えることができるし (281)、独立後の西部共和国で山賊出身のエルナンデスが陸軍大臣に就任していることも同様に途上国の政治の杜撰さを暗示するものである。
- 10 この点に触れている貴重な論考として、本作の絶望的な展望が悲劇としてのインパクトを薄めてしまう可能性に言及しているベアトゥーの議論がある (126)。しかし、全体の議論としてはベアトゥーは『ノストロモ』がニヒリスティックなビジョンを提示する作品ではないと断言しており、悲劇のインパクトが薄められてしまうという先述の事態についても、あくまで可能性として言及しているに過ぎない (130)。
- 11 Graham, pp.129-30、Price, p. 79 を参照。
- 12 例えばエルディナスト=ヴァルカンは本作における「神話」と「歴史」を‘two incompatible modes of perception’として規定している (68-9)。本稿でも、伝説や迷信を含めて神話という用語に統一して論を進めることとする。
- 13 公的な側面に限定された議論ではあるが、ジーン・フランコが同様のポイントを指摘している。‘[Nostromo’s] theft, however, is trivial compared with the long-

term exploitation of the natives in the mine and the ‘innumerable lives’ that are sacrificed to it’ (97-8).

- ¹⁴ この意味においてノストローモがスケープゴートにされていることを論じた研究は筆者の知る限り存在しない。エイヴロム・フレイシュマンはノストローモが‘the sacrifice that societies make in order to live’であると論じ、だからこそノストローモは‘awesome’な存在になっていると述べているが、これはフレイシュマンのマルクス主義的な読解の文脈における犠牲の話であり、ニヒリズムによる悲劇の矮小化を焦点にする本稿の議論とは大きく異なる(176)。

参考文献

- Berthoud, Jacques. *Joseph Conrad: The Major Phase*. Cambridge: Cambridge University Press, 1978.
- Carabine, Keith. ‘Introduction, *Nostramo*’. *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Vol.2. Mountfield: Helm Information, 1992.
- Collits, Terry. *Postcolonial Conrad: Paradoxes of Empire*. London; New York: Routledge, 2005.
- Conrad, Joseph. *Nostramo: A Tale of the Seaboard*. New York: Oxford University Press, 2007.
- Conroy, Mark. *Modernism and Authority: Strategies of Legitimation in Flaubert and Conrad*. Baltimore; London: Johns Hopkins University Press, 1985.
- Erdinast-Vulcan, Daphna. *Joseph Conrad and the Modern Temper*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Fleishman, Avrom. *Conrad’s Politics: Community and Anarchy in the Fiction of Joseph Conrad*. Baltimore: John Hopkins University Press, 1967.
- Franco, Jean. ‘The Limits of the Liberal Imagination: *One Hundred Years of Solitude* and *Nostramo*’. *Gabriel García Márquez’s One Hundred Years of Solitude: A Casebook*. Ed. Gene H. Bell-Villada. New York: Oxford University Press, 2002. 91-107.
- Gekoski, R. A. *Conrad: The Moral World of the Novelist*. London: Elek, 1978.
- Graham, Kenneth. *Indirections of the Novel: James, Conrad, and Forster*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988.
- Hay, Eloise Knapp. ‘*Nostramo*’. *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Ed. J. H. Stape. Cambridge: Cambridge University Press, 1996. 81-99.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*.

- London: Routledge, 2002.
- Kettle, Arnold. *An Introduction to the English Novel. Vol. 2, Henry James to the Present Day*. London: Hutchinson, 1953.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. New ed. London: Chatto & Windus, 1960.
- Lothe, Jakob. *Conrad's Narrative Method*. Oxford: Clarendon, 1989.
- Oates, Joyce Carol. “‘The Immense Indifference of Things’: The Tragedy of Conrad’s *Nostramo*”. *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Vol. 2. Ed. Keith Carabine. Mountfield: Helm Information, 1992. 590-607.
- Parry, Benita. *Conrad and Imperialism: Ideological Boundaries and Visionary Frontiers*. London: Macmillan, 1983.
- Price, Martin. ‘The Limits of Irony’. *Modern Critical Interpretations: Joseph Conrad’s Nostramo*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1987. 69-79.
- Reilly, Jim. *Shadowtime: History and Representation in Hardy, Conrad and George Eliot*. London; New York: Routledge, 1993.
- Ryan, Kiernan. ‘Revelation and Repression in Conrad’s *Nostramo*’. *Modern Critical Interpretations: Joseph Conrad’s Nostramo*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1987. 43-55.
- Takahata, Yusuke. ‘On the Discrepancy in the Narrative Focus of Conrad’s *Under Western Eyes*’. *Reading* 33 (2012): 53-64.
- . ‘Authorial Attitude in Joseph Conrad’s Third-Person Fiction’. Diss. Royal Holloway, University of London, 2016. Unpublished.
- Tillyard, E. M. W. *The Epic Strain in the English Novel*. London: Chatto & Windus, 1958.
- Warren, Robert Penn. ‘Introduction’. *Nostramo*. New York: The Modern Library, First Edition, 1951. vii-xxxix.

(たかはた ゆうすけ 埼玉大学 専任講師)